



卷 頭 言

日植調東北支部会報第30号を刊行して

日本植物調節剤研究協会 理事 高橋 昌一
東 北 支 部 長

日本植物調節剤研究協会東北支部会報（以下会報という）第30号を平成7年2月に刊行した。

日本植物調節剤研究協会東北支部（以下支部という）の源流は、昭和38年6月、全国にさきがけて結成された東北地域雑草防除協議会にまでさかのぼる。そして、昭和39年3月、雑草防除協議会会報第1号を発刊しているが、それが会報の嚆矢であり、それより数えて第30号ということになる。

昭和44年4月、東北地域生育調節物質協議会（昭和39年3月、東北地域雑草防除協議会を東北地域生育調節物質協議会に改称）を改組して支部を発足させているので、平成6年度は支部創設25周年にも当たる。

したがって、平成6年度は、支部にとっては第30号、25周年という節目の年である。

支部が創設された昭和38年は、東北地域ではPCPがほぼ最高に近い使用面積に達した時期であるし、PAMなどが普及に移されて間もない時期でもある。また、農業生産の選択的拡大を意図した稲作の省力化を推進しようとしている時期でもあった。加えて、低毒性除草剤の開発に関心が高まっている時期でもあり、時宜を得た設立といえよう。

第6号より東北支部会報となる。支部10周年記念号として刊行された会報第9・10合併号は、「東北農業における除草法の歴史と進歩」を特集し、東北各県における雑草防除研究の歴史、除草剤による雑草防除の普及と歴史、雑草及びその防除研究の課題、除草剤使用面積の推移などが記載されている。2、4-P Aの試験から、県によっては大正末期からの雑草防除研究をふりかえっているし、雑草防除研究の課題と結果

の概要も記述されている。執筆者の一人である筆者がいうのもどうかと思うが、非常な労作であり、大作である。

会報第12号では「ホルモン系除草剤の低温・葉害が生育に及ぼす影響」を、第13号では「大豆畑の雑草発消長と雑草害」を、第14号では「東北地域の水稻稚苗移植栽培におけるフェノキシ系混合中期除草剤の葉害について」を特集している。第20号では「東北各県における雑草防除の現況と課題」を特集し、加えて、先輩各位の「思い出」を掲載している。

平成2年は支部設立20周年にあたっているのので、会報第25号は支部設立20周年記念号とし、「東北地域における水田多年生雑草の発生動向」「優占的畑作雑草」を総括しているし、さらには、多くの方々からの回想、所感、提言などをいただいている。

会報第30号では、東北地域で長年、しかも、多くの水田で使用されていたCNP除草剤が胆道がんと疫学的相関があるとかで、平成6年3月、突然使用自粛となり、その対応で大変苦慮されたと思われたので、「初期除草剤に対する各県の対応」を特集した。また、雑草防除協議会会報第1号から日植調東北支部会報第29号までの総目次を載せている。

会報を通覧すると、東北農業の位置づけや東北農業の動きを反映しているように感じられる。

支部と会報が今日あるのは、創設から現在まで、先輩各位、関係各位の直接、間接のご尽力の賜ものであり、衷心より感謝申し上げます。

衣鉢を継いで3年目、商い3年というが、驚馬は所詮驚馬、今後とも各方面にわたるご高配をお願いします。